

正宗白鳥

懺悔文學



懺  
悔  
文  
学



『新生』は、懺悔ざんげ文学と見倣まねされているらしい。作者自身も「懺悔」のために書いたらしい口吻こうふんを洩もらしている。聖オーガスチン以来、欧洲には懺悔文学が頻りに出ているが、これはキリスト教というお宗旨しゅうしに關係を有っている。神エホバに向って懺悔するのだ。キリストに向いてマリヤに向い、あるいは一介の僧侶そうりょに向って、罪を詫わづらびるのだ。人間を罪の子としてしまった宗教の迷妄は甚しいものである。宗教の迷信の打破された今日でも、宗

教的懺悔の気持は人心に根深く残っている。……日本に  
おいてもそうだ。

しかし、私は、世にいうところの神がもし有るとして  
も、それに向って決して懺悔すべきものではないと思う。  
他人に害を加えた時に自己の罪を詫びることや、自己の  
過去の行為を悔悟することはしばしば有るにしても、絶  
対の立場からいったら、人間の行為に是も非もあつたも  
のじゃない。それで、オーガスチンの懺悔録などを今日  
の目で読むと、随分馬鹿らしく思われるところが多い。  
あんな空妄なことに懺悔の涙を流すのは、人間の意力を

削ぐようなものである。

島崎藤村氏の『新生』について考えると、そのいわゆる懺悔は、宗教的情調を帯びているに關らず、必竟社会の制裁に対する恐怖に基いている。オーガスチンなどが恐れていた神の影は薄らいで、社会が神になっている。

「私のようなものでもどうかして生きたい」ための焦慮煩悶であつて、その恐怖焦慮煩悶が現実の人間苦として我々の胸を打つのだ。『破戒』の丑松が、自分の素性を傍人に疑われて嶮しい目で見られるのに堪えられなくなつて、ついに自分から進んで自己の素性を告白するに至

る心情は、『新生』の岸本の懺悔の動機と比較さるべきものである。丑松の方は自分には何の罪もなくって、社会の因習がいけないのであり、岸本の方は現在の人間社会の道徳に違反した自己の行為に基くのであるが、どちらにしても、社会の侮蔑を恐れ人々に疎外されることを恐れているのに差別はない。丑松の父が素性を「隠せ」と子に教えていた如く、岸本の兄も「隠す」ことよって社会的平和を得ようとしたのであるが、隠し了おおせるに堪えられなくなった岸本は、すてみ棄身になって、いわゆる懺悔をした。そして、その結果から起ったいろいろな苦艱



を経て、ついに、自己一人の世界に安住するような聖境に達したらしい気持にもなったが、それも詩人的の夢に過ぎないので、生きた人間を支配している本能は、夢を食って安んじてはいられなかった。「人の経験というもののかなさがその時ほど彼れを嘆息させたこともなかった。——あれほど寂しい流浪の旅に行つて、異郷の客舎の床の上にひふし 跪き、……男泣きに泣いても足りないほどの痛苦を一度経験しながら、——その経験が少しも彼れの頼みにならなかつた。彼れは新たに同じ事を悲まねばならないような位置にその時の自分を見出したのであつ

た」といつている。

それで、『新生』 一卷は、朗らかな新生に到着して  
るのではなくって、読み了<sup>おわ</sup>って憂鬱と本能の執拗さに溜  
息を吐かされるのだ。迷った人間が、迷った苦しみと、  
迷わない人間では味い知られない秘密な喜びとを唄って  
いるので、この懺悔文学に人生の救いがある訳じゃない。  
そう思う者のあるのは、懺悔を宗教と連関させて、懺悔  
をしたら罪が亡んで神に救われるという伝統的空想に支  
配されているからなのだ。藤村氏自身の『浅草だより』  
の一節に曰く、「新生は言い易い。しかしながら、誰れ

がたやすく新生に到り得たと思うであろう。北村透谷君は心機妙変を説いた人であった。そしてその最後は悲惨な死であった。新生を明るいものとばかり思うのは間違いだ。見よ、多くの光景はむしろ暗黒にいて、かつ惨澹たるものである」と、氏自身があらかじ予め、後年の自作を批評しているようなものだ。

我々は作者の熱情と芸術上の手腕に心を奪われて、陶醉状態に陥って読み終るのだが、根本の問題は、社会制裁の恐怖と、本能の強烈とにあるので、その問題はずまりは未解決のまま残っている。「私共はすでにすでに勝

利者の位置にあることを感じますね」と、終りの方で節子はいつているが、我々はそれを文字通りに感ぜられるであろうか。むしろ痛ましく思われるのではないか。作者は彼女の台湾行を壮としているが、私などは、懺悔により解脱した、いわゆる浮世の勝利者を彼女の上に見ることは出来ないで、浮世に悩み疲れた一人の淋しい女の影を、そこに見るばかりである。(八月二十日)





日本文学電子図書館

---

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
2002年6月14日 第1刷

---

日本文学電子図書館